

第6回NSRIフォーラム特別講演会

たたかう東京
『～世界都市・東京の底力を引き出す7つの提案～』



伊藤 滋 氏

早稲田大学 特命教授

日時 2013年7月11日(木)

場所 日経ホール



◆伊藤 滋 (いとう・しげる) 氏

早稲田大学特命教授、東京大学名誉教授

1931年東京に生まれる。

1955年東京大学農学部林学科卒業。1957年同学工学部建築学科卒業。

1962年同学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程終了。

1963年～1965年 M.I.T.ハーバード大学共同都市研究所客員研究員。

1981年東京大学工学部都市工学科教授。1992年慶応義塾大学環境情報学部教授。1999年～慶応大学客員教授。東京大学名誉教授。2001年～早稲田大学特命教授。

アジア防災センター・センター長、2030年の東京都心市街地像研究会座長。環長崎港地域アーバンデザイン専門家会議座長。

<著書>「提言・都市創造」(昌文社 1996年)、「市民参加の都市計画」(早稲田大学出版部 1996年)、「東京のグランドデザイン」(慶応義塾大学出版会 2000年)、「東京育ちの東京論」(PHP出版 2002年)、「東京・きのう今日あした」(NTT出版、2008)

たたかう東京 ～世界都市・東京の底力を引き出す7つの提案～

谷 大変長らくお待たせいたしました。ただいまから日建グループ主催によります NSRI フォーラム特別講演会を開催させていただきます。本日は、お忙しいところ、また、お暑い中、お越しくださいまして、まことにありがとうございます。

皆様方には日ごろから大変お世話になりまして心から感謝申し上げます。本日は講演会並びに懇親会を開催させていただきますので、最後までごゆっくりとお過ごしくださいませ。

早速、本日のご案内役は、私、日建設計広報室の谷礼子でございます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。(拍手)

本日の講演会を始めさせていただきます。本日の講師は、伊藤滋先生でいらっしゃいます。ご案内のとおり、先生は現在、早稲田大学特命教授でいらっしゃり、また東京大学名誉教授でいらっしゃいます。本日は、「たたかう東京～世界都市・東京の底力を引き出す7つの提案～」と題して、ご講演をいただきます。

それでは早速、先生にご登場いただきます。伊藤滋先生でいらっしゃいます。皆様、大きな拍手で先生をお迎えください。(拍手)

先生、よろしくお願ひいたします。

伊藤 皆さん、たくさんお集まりいただきましてありがとうございます。時間が限られておりますので、前口上抜きにすぐに話題に入っていきたいと思ひます。

「たたかう東京」というテーマにした私の一番の真意は、森記念財団の世界都市総合ランキング 2012 の観光ランキングで、観光客がどれぐらいそれぞれの都市に来ているのかというのを見て唾然としたことです。森記念財団の都市ランキングは 50 ぐらいの都市を対象にしていますが、1 番目はロンドンで年間 1475 万人、ニューヨークが 928 万人、パリも入ってくると思ひますが、そこは抜かして、我々に近いところでソウルが 880 万人、上海が 666 万人、東京が 410 万人です。

日本に来ている外国人の数は、去年で 840 万人ぐらいでしょう。出ていく日本人が 1600 万人か 1700 万人ぐらいありますから、1 対 2 です。日本人 2 人が出ていって、

外人さん1人が来る。ソウルの880万人というのは、日本に来る外国人全体の840万人より多い。これは大変なことになった。

5～6年ぐらい前まで、僕たちも、お役所の方もそうだと思いますが、国際比較するときに、ドイツはどうだ、ニューヨークはどうだ、ロンドンがどうだと言っていました。当時からソウルやシンガポールの話はありましたが、まだ距離があるなと思っていました。ところが、ここ1～2年、日本がもたもたしている間にソウルが非常に力を持ってきました。上海もこれからもっともっと力を伸ばしていくと思います。

そういう中で東京をどうするのか。一言で言うと、日本は年寄りになって元気がなくなりました。その結果として東京の観光客は410万人ぐらいでいいのかということです。

これは何かやらなければいけない。ソウルと真正面に戦う。10年ぐらい前はソウルなんて大したことないと思っていた。いよいよソウルと真正面から戦わなければいけない。そういう時代になってきたんです。戦うためには真剣にいろいろなことを組み立てていかなければいけません。

西欧社会の国の中では、ニューヨークとロンドンとパリは三都物語。キリスト教社会の中ではこの3つでしょう。アジア系の国の人口が増え都市も大きくなってきた時に、ニューヨーク、ロンドン、パリと比較するアジアの都市はどこか。僕の考えでは、上海、東京、ソウルです。

考えると当たり前なこと、日本人は韓国の人たちから知恵を授かって、それを日本風に仕立てることを1000年以上やってきているわけです。中国の知恵もかりてきた。人間の1人1人の能力は、韓国の人の方が高いかもしれないし、中国のエリートの方がずっと高いかもしれない。日本だけが偉いのではない。そういうことを真正面から僕たちにいろいろな事実によって知らせてくれたのが、ここ1～2年でしょう。

それを前提にして、東京はどう戦うかといった時に、役人の既存の考え方は全部なしにしてください。何故かというとな役人は法律をもとに仕事をします。法律というのは、ソウルが急に浮上してきた、上海が急に上がってきたということを前提につくってあるわけではない。都市計画法にしても、建築基準法にしても、何でもそうです。日本という国が静かに一定の成長をしてきた時に起きるいろいろな矛盾を解いていくためにつくってある法律です。日本が生きていくためには都市と都市の戦いだ、となって、「東京がつぶれば日本がつぶれる」、こういう話をジャーナリズムは書きます。あながちこれはインチキではない。そうなった時に役人の持っている法律の所管業務

をずっとやっていて戦えるのか。役人の持っている所管の法律を超えた形で、新しい世界と戦う東京のための法律をつくって、それでひとつやってくれませんかという話になります。

僕は7という言葉が好きなんです。今日テレビを見ていたら、「七福神」のインチキな話がありました。一方で、7というのは、セブンスターもそうですが、割合福を呼んでくれる数字です。だから「7」という数字が好きです。東京がこれからソウルと上海に正々堂々と何もインチキをしないで経済競争や都市間競争で勝っていくために、東京で7つ重要なことを伊藤が選びました。それが何なのかをここで皆さんに説明します。

(図1)

「世界における東京の都市力は極めて高い」。日本の経済力は、国民総生産で世界の3番目です。1番目がアメリカで、2番目が中国、3番目が日本。中国の総生産のオペレーションを中国政府がやるよりは、世界3番目のストックの日本政府がオペレーションするほうが世界に対する影響力は極めて大きい。日本は世界3番目の国民総生産を持っていて、その牽引車が東京だということを世界は認識しているはずですが、実際は世界で認識している人たちはほんのわずかで、東京というのは余り知られていないんです。

「たたかう東京」の東京に住んでいる皆様方は誇れる人材です。それから資産があります。例えば、日経新聞社も、数年前に新しくなって、ピカピカで非常に使いやすい。これが資産です。こういうものを生かす。鉄道もそうです。世界から人とモノとカネを呼び込む都市づくりのプロジェクト、これを提案しようと思います。

繰り返し言いますが、こういう提案は、所管業務を持っている法律を守る役人にとっては、大変嫌なことです。知ったこっちゃないんです。ところが、こういうことを言わなければいけない時代になった。

(図2)

起承転結です。

(図3)

①「都市圏人口と域内総生産及び1人当たりGRP」。まず、都市圏人口です。東京はニューヨークの倍あります。3200万人。ロンドンの約2.5倍。上海が、多分3000万人いく。驚くべきことに、韓国は国の人口約5500万の中の4割がソウルの大都市圏に

集まっています。すごいことが起きています。でも、そうは言っても、東京は都市圏人口が大きい。1人当たりの分配所得を見てみると、ニューヨークは金融都市ですから格段に高いんです。1人当たり8700ドル。東京は4600ドル。これは2011年のデータです。上海はまだ1000ドル。ソウルも1300ドルですが、すごい勢いで伸びていきます。1人当たりGRPはロンドンと東京が大体同じぐらいで、ニューヨークはその倍ぐらいあります。

(図4)

②「都市ランキング」。これは抽象的ですが、森記念財団の世界都市総合ランキングを2年に1回やっています。東京は大体4位に定着しています。6位がソウルです。ソウルがヒタヒタと上がってきています。上海も上がってきます。3位のパリが1349.6です。東京4位、1324.9。その差25ポイント。これはどうにかならないか。それが、なるんです。

(図5)

なるために何を起こしたらいいか。羽田の滑走路を6本つくる。5本でもいい。5本でも187まで上がります。パリのシャルル・ド・ゴールの滑走路はこれ以上増えませんから。

それから、文化交流。これは歌舞伎や能などの日本的なものもありますが、そのほかにブロードウエイ型やオペラ、博物館、こういうものが日本はみんな中途半端で小さいんです。ヨーロッパやアメリカに行くと、ドドーンと大きいものがあります。ニューヨークのメトロポリタン博物館や大英帝国博物館。あれほど大きくなっていいのですが、とにかく、日本にはこれだと世界に頑張れるような文化的資産がないんです。みんな中途半端。ビッグサイトもそうです。

僕が言いたいことは、東京が戦うためには2つのことをやらなければいけない。1つは世界共通の言葉、例えば音楽や展示場。ロンドンと東京とニューヨークとミラノ、4つの圏域に同じレベルの展示場があって、展示場をやるプロフェッショナルな集団が、そこにどういう展示をしたらいいか議論できるような能力を持たなければいけない。これは世界先進国共通の能力です。これが1つ目です。もう1つは、エキゾティシズムです。日本でないと、ないものです。

この2つをもって戦わなければいけない。交流というのはまさにそういうところです。世界共通のオペラ、歌舞伎はエキゾティシズムです。ソフトとハード両方のもの

を持つということが極めて重要です。それができればソウルをぐっと引き離すことができます。

「交流」を上げれば、パリを抜きます。ロンドン、ニューヨーク、東京と、3位に上がります。「文化・交流と交通・アクセスが改善できれば、パリを抜ける」。

(図6)

3つのデータがあります。社人研（社会保障・人口問題研究所）という厚生労働省のお墨つきの人口予測の専門機関のデータと、2つ目は東京都の推測のデータ、それから、私たち森記念財団ですずっとやってきている推測のデータです。これで何を言いたいか。東京都23区の2010年の人口は、東京都と社人研、森記念財団も900万人だった。ところが、今までの社人研の予測を見ると、実際より下を常に予測しています。専門家はみんな知っています。社会保障・人口問題研究所の厚生省の予測は常に実数値より下に向かっての予測をしている。これでいくと、ずっと下がるんです。2030年になると883万人で、今より17万人下がる。東京都の人口も、それほどではないけれど、同じぐらいです。森記念財団は上がっています。今までの1990年から2010年までの実数値は森記念財団のラインに沿って上がってきたんです。

2010年までは、森記念財団のラインに上がってきた。問題は、2010年から2030年がどうなるかということです。ここは誰もわかりません。No one knows。それぞれの仮定に基づいて算出するしかありません。

森記念財団はこういう立場をとっています。東京は戦わなければいけない。だから、常に東京のメタボリスティックな体質を変えながら、有能な若い人を日本から集める。人口の社会流出入。これは今までと同じぐらいに高目に見ています。「たたかう東京」としてはこの数字を使うということです。2030年、950万人になります。社人研予測とは70万人の違いがあります。

官僚の読みと、「たたかう東京」のアジテーターの読みの差は2030年に70万人。この実数を、僕は2030年に100歳になるんですが、生きていて見てみたいものだと思います。僕たちはこれを使うということです。

(図7)

ただし問題があります。どういう問題かということ、2010年の老年人口は180万人ですが、2030年に223万人になります。43万人の増加します。2040年は223万人に43万人を足してください。266万人。これから20年かかって東京の年寄りが伸びていく

数字は、2030年からその倍のスピード増えていくということです。そうなると、生産年齢人口が年寄りを背負い込む量はとて大きくなります。どう見ても、「たたかう東京」には、2030年から後、国土強靱化のためのカネはない。年寄りの面倒を見るカネしかない。老人でも75歳まで働いてもらわなければだめだ、僕はこの間からそう言っています。老人は75歳まで働く。こういう明白な事実について、わがままは言っていないと言っています。

2030年というのは、これまでの都市計画で、いろいろな行動を頑張ってとれる最終限度で、2030年から2040年は別なことを考えなければいけない。別なことというのは、大きいカネの公共事業はもしかするとできない。むしろ細やかな公共事業、小さい公共事業を皆さんの合意で、2030年から2040年は数多くやらないといけない。そういうことを言いたい。

(図8)

僕は竹中平蔵さんや八田達夫さんと、ここ1カ月で何回か会っています。竹中平蔵さんは、競争力会議に報告書を出しました。なかなかいいことが書いてあります。八田さんが言った言葉は「特区による大胆な規制緩和と各種制度・施策の総動員」。余りよくわからない。いろいろな特区がこのごろ出ています。特区をつくれれば別な扱いが法律でもできるから、特区の中だけは今までの常識と違う法律を運用して規制緩和しろということです。

2番目、「国家戦略として総理主導のスピード感のある実行」。これは竹中平蔵さんも言っています。総理と地方自治体の首長、例えば県知事と、仕事をしたい大会社の社長の3者の会談で仕事の段取りをして進めていくというちょっと無理な話です。「総理」をここに出してこなくたっていいのではないかと思うんです。総理といたって実体は総理ではないですね。役人です。また役人が出てきてはスピードがよくない。

それから、国土強靱化です。

(図9)

竹中平蔵のメモには少し面白いことが書いてある。15~16書いてあるんですが、僕は全部チェックしました。僕たちが都市計画や国土計画で日ごろ大都市に対して言っているいろんな話を全部入れています。どこかの知恵を竹中平蔵は入れてきたんです。

1つ1つ全部説明できますが、時間がかかりますが、このメモの15項目は僕のような専門家から見てもそうおかしいことではありません。問題は、これを新しい国家戦

略にかかわる専門家がどうこなすか。僕は多分、こなせないと思うんです。人からの借り物がかなりありますから。

(図10)

それでは、伊藤はどうか。ここからようやく話が始まります。「前提、東京を安全で安心な街にする」。何を言っているかという、14~15年前、小泉政権の時に、首都直下の議論があった。ミュンヘンの損害保険の再保険会社が世界中の都市の災害危険度を数字で出した。その災害危険度はニューヨークが42か43。ロサンゼルスが100です。サンフランシスコが140。パリ、ベルリン、ロンドンが25~26。それに比べて東京は710です。こんな馬鹿なことあるかと僕たちはカンカンに怒って、どういうふうに計算したかをチェックしました。3つの係数の積でやっているんです。地震が起きる危険性をAとする、それに対応する抵抗力は人間がつくる。例えば日本でいえば新耐震や木造の不燃建築化です。そういう抵抗力をBとする。A×B。それからCですが、これが保険業界の概念で、人口集積なんです。AとBが同じであってもCで人口が倍になれば、その危険は倍になる。考えたら、保険屋はカネを払うほうですから、払う会社として、どこにどのくらいカネを払う危険性が高いかといったら、同じ危険度でも人口集積で倍のところは倍の人がカネを払えと来るので危険性が高い。馬鹿みたいな話でした。

問題はAとBです。東京の人口集積をニューヨークと仮に同じにします。防災の抵抗力はニューヨークの4倍にします。そして自然、地震とか津波。これは神様がつくったものですから、ニューヨークより東京のほうが起きやすい。これはそのまま。そうすると、710が大体120~130になります。120~130というのはサンフランシスコ並みです。そこまで落ちるんです。それでも、普通のおカネを持っているニューヨークやロンドンの保険業界の連中から見ると、3.11もあったので、東京は危ないと思うでしょう。

だからこそ、おカネを持っている人たちが東京に来ておカネを落とすためには、東京はとにかく安全・安心。安全は地震、安心は防犯、それを保障します。これを前提にして次に2番目、3番目、4番目をやる。まず安全と安心が東京にとっては一番重要な言葉です。

2番目。安倍政権が「Visit Japan・Invest Japan」と言っています。それを全部東京にかえる。「Invest Tokyo・Visit Tokyo」。インベスト東京で、東京にカネを持って

きてくれよと言うと、そういう人たちの会社、例えばインターナショナルGEという会社が東京にできる。そこに外人さんが家族連れで来る。そうするとまず安心・安全が必要です。その次になるべく質のいい住宅が欲しい。事務所だって、ニューヨークやロンドンの新しいビルと同じぐらいのものがが必要です。2番目には「住みやすい」、それから「働きやすい」。

日本人は往々にして「働きやすい」、「住みやすい」なんですが、特にアメリカの連中を呼ぶためには「住みやすい」、「働きやすい」です。そのためには質のいいマンションと質のいいオフィスをどんどんつくります。当たり前のことなんです。そういうふうに行っているかというところでできてない。特に安心・安全を宣言したところは、「住みやすい」、「働きやすい」性能のいい建物をつくらないといけないんです。

そこに人が集まる。これは決定的です。

海外との交流というのは決定的に飛行場です。飛行場の滑走路が何本あるかによって、その国の国際化の競争力が決まると言ってもいい。東京は成田も入れて現在6本です。成田2本と羽田が4本。成田は使いにくいんです。3本にしても余り使えない。成田2本と羽田6本の8本。8本にすれば、ヒースローより性能はよくなります。パリよりも性能がよくなるかもしれない。戦えるようになる。6本目はビジネスジェット専用です。ビジネスジェットは、皆さんまだ距離が遠いように思うけれども、世界共通の話題です。世界のおカネを持っている連中がおカネの貸し借りをやる会談のベースメントはビジネスジェットで来るのが当たり前だということです。日本の人たちは理解していません。役人も理解していない。卵と鶏のようなものです。利用頻度が低い、需要が増えるまで待ちましょう。もし、世界で東京の経済が駄目になるのが見えてきているなら、「利用頻度が低いから待ちましょう」ではなくて、つくって需要を起こそう。

もう1つ僕が思うのは、クルーザー。クルーザーの需要が多くなります。横浜に京浜地域のクルーザーのメインの大栈橋がありますが、あれは前が高速道路の橋で、20万トン級の船が入れなくなった。長崎は入れるんです。女神大橋。横浜は入れないけれど、長崎は入れますと威張っていました。なら、東京でつくろうではないか。東京でクルーザーを集める場所があります。品川です。東京のベイブリッジの手前ですから橋をくぐらなくていいんです。

それから「情報交換がしやすい街にする」。これはいろいろな意味がある。人が集ま

るというのは国際的です。情報交換しやすいというのは、日本人が鉄道をよく使って、自動車をよく使って、コンピューターをよく使うという話ですから、月並みな話です。

3番目。これが僕は物すごく重要だと思います。「感動し、楽しみ、尊敬される」。日本に来て感動する。確かに宮城に行って感動するけれども、あれはボイドの空間ですから、二重橋まで行って、「この向こうに天皇がいます」と言ったって、外人さんのようなプラグマティックな人は想像できない。ロンドンに行くとウインザー城でわかる。ウインザー城の離宮の奥にイギリスの女王様が時々泊まられているんですよと、中まで見せてくれます。感動というのは世界共通のランゲージです。皇居は禅の領域でしょう。無のものが一番いい。外人さん、わかったような、わからないような顔をして帰っていく。この暑い時に、つまらない。砂利道を二重橋まで行って帰っていく。ご苦労さんです。これでは駄目。

先ほど僕が言ったように、世界共通の土俵で彼らを感じさせなければいけない。世界共通のベースで楽しませなければいけない。世界共通の感覚で尊敬させる。やはり東京はすごい。と同時に、エキゾティシズムです。エキゾティシズムで感動し、楽しみ、尊敬される。この2つの尺度でこの3つの言葉を満足させるような都市づくりをしようではないかということです。要するに、「Visit Japan・Invest Japan」ということを易しく言うと、こういうことなんです。

ただ、この後ろには冷酷な事実があります。例えば仕事がしやすいオフィスビルを三井不動産や三菱地所がつくれば、東神田や横山町あたりの小さい鉛筆ビルは全部がらあきになります。これは玉突き現象です。大資本が海外の資本を呼び込むためにつくったものはうまくいって、中小企業がつくった古いオンボロビルは誰も人が来なくなって値段がつかないということが起きる。これは仕方がないんです。それまでどうにかしようということになると、民主党になってしまう。

安全で安心な街。これを前提にして、住宅とオフィス。飛行場と船着場と鉄道。感動し、楽しみ、尊敬。これは後で言いますが、それぞれあります。

ついでに言いますと、都市計画の連中は、日比谷公園と明治神宮を、ニューヨークセントラルパーク、ロンドンの公園に比べて、どうのこうのと議論する。これは世界共通のスケールで比較していますが、比較しても、専門家の間では会話が成り立つけれども、普通の人には理解できない。

緑で僕が一番彼らに訴えたいのは、盆栽です。盆栽というのは外国人にとってはシ

ヨッキングなんです。日本人がつくった盆栽のすごいところをバーッと見せる。ただ並べるのではなく劇場で見せる、または展示場で見せる。盆栽というのは、日本の一番小さいスケールを象徴化して、日本人の繊細な気持ちで作り上げてきた。こういうものに対しては、ムスリムの人も驚く。コーカシアンも驚く。中国はわからない。盆栽に代表される小さい日本の庭園もみんな評価してくれる。例えば、日本人は余り評価しない六義園をすごく評価しています。京都に行かなくても、こういう庭が東京にもあったのか。京都の小さい庭と小さい植木を彼はすごく評価している。これがエキゾティシズムです。そういうふうに1つ1つ考えてみると、インターナショナリズムとエキゾティシズムの両方の組み合わせで東京を組み立てていくという戦略が、3番目に必要だということです。

(図11)

もう1つ重要なことがあります。これから具体的な提案を皆さんにお示しします。「結論を早くする。事前調整は0(ゼロ)にしよう」。私は、小泉・石原の約束に10年前に立ち会ったんです。皆さんは十分ご存じですが、都市再生特区というのは、「恐れながら」と日建設計と大成建設が大手町1-6の再開発プロジェクトを東京都庁に持っていくと、東京都庁はそれを絶対引き受けなければいけない。引き受けて半年で調整して、東京都庁がイエスかノーの結論を出す。結論がイエスの場合にはその後アセスメントに1年かける。足して1年半でオーケーできるという話でした。ところが、実際に何が起きたかという、恐れながらと東京都庁に持っていく前に、事前の打ち合わせというのがある。役人も悪いが、不動産屋も悪い。事前の打ち合わせをして、全部でき上がってから、形式としてそれを都庁に出す。その間に区役所の干渉や、ほかの会社のいじわる、役人の思いつき、そういうのがワンワン積み重なって、事前の打ち合わせに4年も5年もかかる。事前の打ち合わせに4年も5年もかかって、できたといって、都庁へ恐れながらと持っていく。事前に全部できていますから、あとは2〜3カ月でオーケーでしょう。

小泉・石原慎太郎の昔の再生特区は、あのおり動いていますよ。ちゃんと6カ月以内に結論を出して、アセスに出しています、と言いますが、とんでもない。日本はスピード感覚が物すごくよくない。時間が大切だ、大切だとみんな10年前から言っていますが、まさに世界的な都市間競争が起きるまでは、「大したことないや。これはこれでやらせておけばいい。5〜6年経てば1年ごとに1つ1ついいものができるから

いいのではないか」という調子です。その間にシンガポールや香港など、アジアで事件が起きるんです。

役人というのは、僕が経験したところでは、都庁より区役所の役人がピンキリでね。僕は今危険なことを言っているのですが、これ以上具体的なことは言いません。ピンキリのキリのほうの区役所は、区議会がおっかないという。変な話です。区議会議員は天下国家を論じない。地元ですよ。数百の票のためにいじわるする。そういうことで動かない。これをとにかく何とかしよう。

2番目。附置義務駐車場をやめましょう。あれは僕が元凶なんです。僕が38年につくった学位論文をもとにして、その後の僕の教え子たちが真面目に附置義務駐車場の計画標準をつくったんです。ところが、そのために、空き駐車場が多くなって、家賃がない場合に比べて1割以上、上がりました。2万5000円の家賃で貸せるのを、附置義務駐車場をつくったから2万8000円になる。これをやめましょう。やめても東京がひっくり返るような事態は起きないと思います。パーキングシステムや鉄道が使いやすくなったとか、年寄りが車を転がさなくなったとか、駐車場システムがよくなったなど、いろいろ車を転がさない条件があるんです。これをやめる。それから、皆さん知らないでしょう。消防法と建築基準法で、避難通路や消火栓については、ダブルスタンダードで全部違うんです。両方の指示に従ってやらなければいけない。これでは建築屋は泣きますよ。

これは、安倍さんや大臣や役所の次官や局長が決めることではなくて、技術職の一番下を支える人間がやっていることなんです。彼らは真面目ですから、建築基準法の赤本のとおりによります。そのために国が潰れるんです。国が潰れない時はいいですよ。だけど、日本はもう目の前に国が潰れる状況がたくさん起きてきています。財政赤字から高齢化、新興国の追い上げ。そういう時に今までつくってきた慣習化された計画標準や技術基準を一度全部とってみたらいい。とって日本はちゃんと生活しますよ。火災も増えないですよ。交通違反も増えないですよ。

3番目は、もっと危険なことを言っています。全員合意は5分の4にする。5分の4でいけることは4分3に、全部1段階下げる。再開発で最後は過半数だっていいのではないか。これは私が、自分で経験したんです。地権者が50人ぐらいいて、中核的に一生懸命やろうという人たちが24~25人いた。残りの24~25人の説得が大変なんです。ここで人間像がはっきり出てくる。人間像の実体なんていうのは、区役所の役

人、都庁の役人、国の役人が何分の2にするというときには全然考えていない。判を押すのが嫌で逃げ回るといふ人もいる。何の理由もないんです。認知症のおばあちゃんがいて、弁護士がついているけどうまくいかない。これからどんどん増えますよ。判を押さない人間が増えているんです。物事の決定に関与したくない。それからやぐざ。そういう人たちが50人の中で1割以上、6～7人いました。僕は25人の過半数がとれたら、残り的人たちはイエスもノーも言わなくていいと考えています。過半数とったら、それで都市再開発やってください。そうでなければ、東京の中は絶対何もできなくなります。そういう提案も1つ議論してみたいのではないかと思うんです。そのかわり中核的過半数が賛成ですから、確認した後、ガッチリとスクラムを組みやすいのです。

今日は言いたいことを全部ここに書いたんです。かなり大事なことです。

(図12)

それを前提にして「7つの具体的な都市計画の提案」をします。

①は「山手線内の安全市街化」。安全にする場所は何も東京23区の必要はないんです。山手線の中だけでいいんです。なぜか。首都直下地震の被害想定ではどこで火災が起きるか。東京都の総務局が全部調べています。23区についての地図がある。例えば久我山5丁目というところを調べると、首都直下地震が震度7で起きたときに出火が2件あると書いてある。久我山4丁目は質がいい住宅が多いから、出火はゼロ。その差は何かというと、4丁目のほうは住宅条件がいいから建物は倒れない。5丁目のほうは住宅条件が悪いから倒れる。倒れる建物が10軒あれば、燃えるのが2軒出る。

そういう地図を見ますと、山手線の中は大体安全なんです。ついでに申し上げますと、東京の首都直下地震が起きた、出火点から火が出た、風が強い、これは大火になるぞ。皆さんの家の周り、例えば100軒の住宅のうち65～66軒までは燃えない、倒れないとなると、残りの質の悪い建物の30軒のうち、火が何軒か出る。それでも3分の2燃えなければ大火にならない。僕たち専門家は、東京23区の市街地で出火点の分布を調べながら、その地域の建物が100あったとき、そのうちの65軒か66軒が木造の防火構造と鉄筋コンクリート造ならば、その地域は大火にならないから、少しは燃えるけれど安心してください。そういう説明をしています。

木造の建物は100軒あると、年間100軒のうち2軒ぐらい建て替えがあります。1.5軒かもしれません。地震が起きないで30年経ちます。30年経つと、古い建物100軒

の2%ずつ建て替わっていきますから、60%が新しくなる。65%になると大火になりませんから、30年地震がなければ東京の街はかなり燃えにくくなるんです。特に燃えにくくなる場所がどこかというとな手線の中です。山手線の中で燃えやすいところは限定的です。1つは神楽坂。物すごくいい街ですが、燃えます。しかし、あれを全部木造の建物で防火造にできます。これは東京都も決めた新しい防火地域というのがあって、新しい防火地域の中では、木造で絶対に火が移らないという構造を指定して、それで建てれば新しい防火地域の建物として認定することになっています。

もう1つは谷根千です。森まゆみさんが大好きな谷根千。根津に行きますと、お寺さんの言問の坂を上がっていく左側に、非常に雰囲気の良い、木造の古い、60年~70年たった建物がたくさんあります。たいてい、前の道路が2間道路、3.6メートルです。これをどうするか。これは先ほど言った新しい防火地域として、東京都が決めた木造で防火造にすればいいんです。

谷根千と神楽坂だけを手当すれば、山手線の中は安全になるんです。そこに外国人さんたちは住んでください。そこなら安全で、おまけに安心な道具も入れますよと言います。安心の道具で一番いいのは防犯灯です。防犯灯は、私が住んでいる浜田山の団地の東角に1つあります。普通の電気より照度が高くて、防犯灯の下に立ちますと、普通の防犯灯より2倍ぐらい遠くでも変なおじさんだと認識できるだけの明るさを持っています。それから、「助けて」というブザーがついていて、すごく大きな音が鳴ります。カメラがついています。そういう防犯灯がこの頃増えています。そういうものを入れるだけで住宅地域の防犯性能がグッと上がるんです。一種の予防効果です。

「住みやすい」ということでは、山手線の中の文京区辺りに外国人に住んでもらいたい。いい住宅地がまだまだあるんです。新宿区の市ヶ谷の辺りにもあります。今外人さんがどこに住んでいるかというとなちこちに住んでいます。しかしカネを払って会社に投資して、日本人を使うような外人さん、つまりアベノミクスの **Invest Japan** の外国人さん、ずばり言うと、フランス人でもドイツ人でもイギリス人でもアメリカ人でも、コーカシアン企業、例えばモルガンスタンレーやシティなどの金融系、ベンツなどで働く外国人は、どこに住んでいるか。もう決まっているんです。港区、それから目黒区です。目黒区は燃えやすくて危ないんです。港区と目黒区と、それから渋谷区。コーカシアンでないアジア系は江戸川区や北区です。すごい差別です。しかし、仕方がないんです。カネを持ってきて日本の中でオフィスをつくって就業機

会を増やして、金融都市東京になるように頑張ろうという人ですから。そういう人には、目黒区は危ないので、ぜひ山手線の中の文京区に安全だから住んでください。それにふさわしいマンションもたくさんつくりまます、そういうことをここで言おうとしているわけです。

(図13)

次は「社会基盤」。④「羽田空港第六滑走路の整備」です。ビジネスジェットを5番目の滑走路以外のところにつくることを提案しよう。航空局のエンジニアが、この案は前からあり、潰すかもしれないが、載せることに反対しない。でも覚悟しろと言うので、後で案を2つ出します。外国人が気楽に来られるというのは、羽田空港の容量強化とクルーザーの受け入れ強化です。

それから、「どこでも簡単に行き来できる街」。地下鉄網の乗り換え施設がひどいんです。地下鉄の入り口、階段のところのことです。ひどいのは幅1間半ぐらいのビルをちょっと借りて、そこに階段だけつくって道路から地下鉄に行く入り口をつくるけど、そこに何も無い。大江戸線の大門の入り口は典型ですね。丸ノ内線でも南阿佐ヶ谷の地下鉄の入り口はひどい。地下鉄の入り口は行儀作法が大事なんです。パリに行きますと、アールヌーボーの20世紀初頭の地下鉄の入り口がしゃれたデザインで、公園の中のしかるべきところにちゃんとあって、そこまで歩いて、これが地下鉄の入り口だなとわかるようになっているんです。ところが、東京の地下鉄はまさに即物的で、あれは先進国東京のやるべきことではない。地下鉄の入り口には必ずキヨスクとちょっとしたたまりがあって、階段がある。そういうスペースで全部整理する。おまけにエレベーターもそこに持ってくれば便利かもしれません。そうすると地下鉄の乗り換えはずっと楽になります。大江戸線との乗り換えではエレベーターのつけ直しが一番必要です。やることがたくさんあるんです。

⑤は「リニア新幹線」。④と⑤は土木工事です。①と②と③はカネを使わない。土木的おカネは使ってないんです。防災と防犯。山手線の中を防火地域として指定するのが①。②「都心部の高容積化」。この地域については、かくかくしかじかの基準に合致した建物は2000%を十分認めてやるという話です。③の国際居住区もそうです。カネを使うといたら、せいぜい防犯灯を余分につくる、交番を増やすぐらいです。思い切って基準を緩めて、役人が絶対できないよというものを突破しなければいけない。

⑤はカネを使うんです。特にリニア新幹線は、名古屋まではナンセンスです。大阪

まで絶対一緒につくらなければいけない。JR 東海が名古屋までのカネしかないと言ったら、名古屋から大阪は国がつくって、それを後で 100 年ぐらいの年賦で JR 東海が買えばいいんです。それが、東京と大阪、名古屋が世界のどこの都市にも負けない国際的に通用するレベルに情報性能と金融の性能と、部分的には製造業の性能、研究性能を上げるために一番重要なことなんです。カネ勘定の話ではない。リニア新幹線は大阪まで。結果として品川の留置線の再開発は起きるでしょう。

(図 1 4)

⑥の再開発化というのはちょっとこそばゆい話です。⑦は再開発です。⑥の江戸城天守閣を復元するという話は前からあります。そういうことを言っている NPO もあります。賛成する皆さんもいます。物すごく大事なことなんです。片方で、不思議なことに江戸城の天守閣の土台石のところは史跡名勝天然記念物で、さわってはいけない、あるいは、精神的イデオログとして、江戸幕藩体制は庶民を苦しめ抜いた、士農工商という農民の搾取のもとに江戸城の天守閣はできたんだのだからこんなものをつくらせるのはとんでもない、そういうことを言う人もいます。これは理屈ですから仕方がない。もっと重要なのは、あそこは天皇陛下の土地だと言うんです。これには困りました。天皇陛下の土地ですが、調べてみると、天皇陛下の土地でも、このところは皆さんでお使いくださいという場所はあるんです。どうもその土地らしいんです。最後はやはり、美智子さんに「済みません、貸してください」と僕が言わなければいけないかもしれない。(笑) 前に会っていますからね。「あなた、どなた。前のことを思い出した」と言ってくれるといい。

外人さんとの国際的会話で、その都市を代表する品物を 1 つ持ってこいといったとき、パリは凱旋門。ナポレオンそのもの、シャンゼリゼをつくり上げた象徴として凱旋門をつくった。ニューヨークはちょっとひねっていますが、自由の女神というのがあります。フランスがああ女神像を大きくして送ってくれたんです。セーヌ川に小さいものがあります。ニューヨークは自由の女神で、エンパイア・ステート・ビルではない。一種の国民的統一性みたいなものが感じられるわけです。ロンドンはビッグベンだと僕は思うんです。あれは民主主義象徴の議事堂の横にあります。ロンドンキャッスルではない。

ソウルも 1 つあると僕は思うんです。立派な政府の建物。ところが、東京はない。皇居があると言いましたが、あれはボイドされた。禅の心理になって、じっと考え

なければ東京の象徴性が浮かんでこない。普通のコーカシアンやムスリムの人たちは即物的ですから、わからない。東京は「江戸城」。これでようやくお互いが同じ土俵で握手できるんです。東京の江戸城とロンドンのビッグベンとパリの凱旋門とニューヨークの自由の女神。

江戸という言葉は戦えるエキゾティシズムの最高です。北斎からあらゆる絵描きは江戸を根城にして書いていました。京都のほうはつまらないんです。浮世絵ではなく、狩野などのつまらない絵です。江戸という言葉をここでバンと打ち出す。そのためには江戸城の天守閣を復元しよう。東京でのオリンピックが決まったら、オリンピックの前につくってしまえ。勘定してあるんです。江戸城の天守閣だけなら500億円でできる。木造です。大阪城も名古屋城もコンクリートで、嫌です。木造にする。ところが、江戸城を木造でつくる時の柱をヒノキの無節でつくろうとすると、今の日本の山の中にはないんです。無節の柱目はない。そうかといって台湾トウヒを持ってきたら国辱物です。仕方がない。節ありでも強度は変わらないんです。江戸城の柱は尺5寸や2尺(60センチ)角です。途中でつなぎますが、これが6層ずっと上がっていくんです。2尺角で無節というのはいないです。だから節ありでいい。そのかわり木造に徹する。木造だとこれは基準法を変えなければいけない。今度の政治特区の中は総理大臣を含む3人で決めればいいのかというんだから、それで決めてもらいましょう。

建物の木材は厚くすると燃えません。1寸の板厚のものに火をつけて燃やしますと、大体2分5厘ぐらいまでは焦げて黒くなりますが、それ以上、中は燃えない。木とはそういうものなんです。エキゾティシズムの最高峰であり、国際共通のメンバー、仲間内になる。ビッグベンの鐘を守るやつと握手してきたとか、江戸城の天守閣の一番上の何かの職人がいるとか、そういうことは面白い。そういうことをぜひやりたい。これは僕の好みなんです。

①、②、③、④、⑤までは、僕の好みというより、世の中で皆さんが言っていることを僕が味つけして、7つを選びました。ほかにもいろいろ言いたいことはありますが、特に7つだけ挙げたということです。⑥は僕の好みで入れました。

⑦は相当時間がかかるんです。カジノをやきましょうよ。カジノは世界共通の約束事です。カジノがあるかないかということで、多分、中国系の華僑の金持ちが東京を理解する度合いが違って来るでしょう。

僕は先ほどからコーカシアンの金持ちと言っていました、日本にとって一番重要

なのは、コーカシアンの金持ちより中国の金持ちなんです。東京はどれぐらい安全で安心だという思いを抱かせながら、華僑特有の大家族主義の第2別邸みたいなのを東京につくってもらって、そこでいろいろなカネを動かしていくということを本当にやらないと、日本は潰れると思います。中国の金持ちを引き入れる。話は単純なんです。

中国もすごい勢いで高齢社会に入ります。しかし、タイムラグが30年あるんです。韓国とは20年。みんながいいかげんな仕事の仕組みをしていますと、中国より30年も前に日本は年寄りでぶっ潰れます。韓国と中国はその状況にいくのに20年~30年ありますから、日本は競争力をなくした分、徹底的にそこで自分の富を増やします。だから、その間、日本がこれから2030年までに力をなくすまでに、中国のカネの力と、ユダヤでもどこでもいいので、カネの力を徹底的に東京に集めて、東京は世界でニューヨークと肩を並べる金融資本の牙城になるということをしないと、日本の前途はありません。

情報産業があるというでしょう。情報産業の決定的な問題は日本語なんです。情報というのは英語帝国主義です。どんなことをしても日本は勝てない。製造業があるじゃないか。製造業も負けています。技術開発力があるじゃないか。これも情報産業の技術開発力と、日本の地道な工学系機械の技術開発力は全然違うんです。世界で大きいカネを動かすのはソフトのコンピューター系の情報開発力です。日本人の一品生産主義的な情報開発力はほんのわずかのカネしか呼んでこない。はっきりわかっているわけです。

そういう状況に置かれていて、なおかつ日本の皆様がそれなりの顔をしているというのは、よほど昭和40年~50年にどこかに隠しカネを隠しているからです。どこかにあるんです。それは証券会社か、農協の銀行がどこかわかりませんが、税逃れのカネ。だからゆっくりされているんですが、10年ぐらいでもうじき底をつくはずです。

(図15)

僕が具体的に描いた図面です。「山手線内の安全市街地化」。これが防火地域。新防火地域は外側に今提案されている。不良密集市街地で一番大火になりやすいところに新防火地域を入れていきます。山手線の中は全部防火地域にしてもいいし、新防火地域を要所要所にかけてもいい。ここの中は全部防火地域にしてください。そうすると、木造家屋がなくなります。災害時の大火の危険度が大幅に低下します。安全地域を世界に向かって宣言します。海外からの居住者の災害危険の不安を大きく低減させることが

実際にできます。目黒区や危ないところに住んでいる外人さんは、今住んでいるところよりも文京区のほうが安全です。だから、文京区に来てください。世田谷の危ないところの外人さんも、新宿区の市ヶ谷辺は安心だから来てください。文京区と新宿区と港区、この辺に、カネを持って、日本人を使う会社を運営できるような外国の人たちに新たに住んでくださいと提案することが前提なんです。

(図16)

「都心部の高容積化」。これが、不動産屋さんが一番興味のあることです。私はこういうふう考えました。面積を広げることはいいことだ。現在 1000 平米の敷地を持っている人が 10 人いた。10 人が勝手に 1000 平米で 6 階か 7 階のオフィスビルをつくるよりも、10 人が相談して 1 万平米の 1 つの建築敷地にして建物を建てる。その容積が仮に 700% だとしたら、1000% にします。その 1000% に面積比要件で 1.5 倍まで上げて、なおかつ防災性能と省エネルギー性能とデザイン性能の要件を全部具備していたら、それぞれの項目に 1 割ずつ性能を上げる。規模性能で 1.5 倍、防災性能 1.1×省エネルギー性能 1.1、それにデザイン性能、これは基本的に隣棟間隔ですが 1.1、1.5×1.1 の 3 乗=1.966 で約 2 倍です。1000% のところは 2000% になる。僕は 2000% を超えてもいいと思っているんです。

大阪の駅前の阪神の再開発で大阪市は 2000% をやっています。東京は表向きですが、大・丸・有で 1600% しか上げない。これは不思議なんです。率直にいうと、1300% を 1600% にするという理屈は何もありません。

敷地規模係数最大 1.5、防災 1.1。1000 平米は基準法上 700% だったら 700% しかあげないけど、1 万平米にしたら 1000% にする。それに防災で 1.1×1.1×1.1 を掛けると 2000% いくよ、こういうことをやろう。割合単純なんです。ブラックボックスをつくらない。誰が見ても理解できる。ただし、これで決めるわけではない。

(図17)

グラウンドゼロ。例の飛行機が突っ込んだワールド・トレード・センターの建て替えで、4000% をニューヨークはあげています。今つくっているワン・ワールド・トレード・センターには 4500% あげている。エンパイア・ステートは前から 3300%。東京の都心部をニューヨーク化する。道路率が 40% 以上のところは都心化でいいのではないか。こういうのがあるんです。それなのに何で東京だけ、きちっと東京駅の前だけ高くして、あとはグラッと下がるようにしてコントロールしなければいけないのか。

むしろ少し離れていても、ここだけは絶対いいものをつくるという地主組合、再開発組合の意欲を高く評価したら、そこは 500%であっても、1200~1300%にしてもいいんです。もっともらしく丸の内だけが 1000%で、カテナリーでずっと容積が下がっていくなんていう絵姿を考えていたのは、第2次大戦の前なんです。そういうことをやめましょう。

(図18)

これは相当苦労した図面です。赤いところは容積率 2000%プロジェクト。2000%を超えても構わない。僕は7という数字が好きなので、2030年までに2000%が7本ぐらいあったらいいなということで、僕の専門的恣意性でつくりました。

1つは、日本ビルの再開発です。もう1つ、後ろに今、郵政の空き地があるので、何とかしなければならぬ。あそこを2000%にしてもいい。こちらは三井さんに敬意を表して、東洋レーヨンのうしろに1つ。僕は八重洲が大好きです。大・丸・有というのは昔の武家地です。それに比べて八重洲は町人街だから面白い。けんかし放題、相当よくないものも入っています。町人街としての味がある。僕はどちらかということ町人街のほうが好きなものですから、東京建物をそそのかして、「2000%でやってみろ」と言いたいと思っています。それぞれ理屈があるんです。これで4本。それから、環2は森ビル。森ビル、起死回生でこれぐらいつくってもらおう。これで5本。

あと2本は新宿。新宿の一番の大事なところは西口の駅前広場です。あそこは安田生命さんと小田急さんが頑張っていて動かないんです。変な会議に行って、変なこと言ったら、すぐ役人に取り上げられてマイナス点になるため、どちらもじっと黙っていて、我々がつくっているメンバーの中にも入らない。それなら、新宿駅西口1000%指定、2000%を2本やるので、つき合わないかということどうなるか。そうすればここが動くと思うんです。問題は、2000%の容積で具体的に超高層の建物を2本作るのにはどうすればいいか。都市計画がそれで知恵を出すんです。これだけは小田急も安田生命も考えがつかない都市計画の専門性というのがあるんです。新宿が頑張ると7本。こういう姿があってもいいのではないかということです。

(図19)

これはディテールですが、赤坂御用地の前に積水ハウスの建物のあるゲート・インステイトウトがあるところです。ここのところは、調べてみると、400%、300%。部分的に200%の第一種住居です。第一種住居と第一種の中高層住専があって、少し

近隣商業が入っている。これは日影で再開発ができないんです。ここも全部目をつぶって500%の商業にしてしまう。現場を歩くと500%にしてマンションでもつくってくれないかなと思うようなところですよ。500%の商業にするということは、普通の役人には考えられない。やれば、ここは物すごく元気になります。ここはいつも中途半端に扱われて、質の悪い小さい建物ができたりするところですよ。

(図20)

附置義務駐車場。土地から建築費込みで1台1000万円から2000万円かかりますが、あいているんです。こういうものはやめてくれ。これをつくらなければならないというので、新宿東口の川瀬ビルのオーナーが来て、僕にぼやいていました。新宿東口の紀伊国屋や新宿御苑の小さい建物はもうオンボロで建て替えなければいけない。建て替えるなら附置義務駐車場をつくらないといけない。附置義務駐車場をつけると、新宿通りの表に駐車場の入り口をつくるから商売ができない。こんなことは人殺しもいいところだ。そういう話です。話としては役人的調整というので、東口でつくる附置義務駐車場を西口のガラガラにあいているセンタービルや三井ビルの駐車場に転用して、そこを東口の附置義務駐車場としてそろばん勘定を合わせるというけれども、役人がそろばん勘定を合わせて、本当にそれを使えるか。使わないですよ。何でもそろばん勘定を合わせて役人として理屈を通すというのに、僕はほとほとくたびれています。人生80年の最後のご宣言です。

(図21)

今、都市計画決定という言葉を使っている。僕は都市計画家です。都市計画決定というのは都市計画審議会を通して延々と大議論をやる。特定街区がそうです。でもそこには何の実のある議論もありません。都計審に行くと、ある党が立って、住民の権利を侵すものである、とかいいます。ほかの党は黙っているんです。一応儀式だから、話をさせる。何の実のある議論もしない。だから、そういう都市計画決定をやめる。

もう1つ、総合設計というのはインチキです。あの勘定はわからない。都庁のプロパーの何とかさんと何とかさんしか知らないと、特定の名前を挙げて総合設計を運用する。これはよくない。みんなが理解できるような大きな筋道がわかっている、最後の詰めだけ専門家がきちっと入ってやる。そういうふうにしたらいいということです。大きい筋道はどういうことかという、敷地規模が大きくなったら1.5倍とか1.3倍にして、防災性能が1あったら、それをA、B、Cの3ランクにして、省エ

ネ性能もA、B、Cの3ランクにして、デザイン性能もA、B、Cの3ランクにして、
どういう点をつけるかを定める。再開発は1.6倍ぐらいの容積アップになるだろう、
そこまでは皆さんわかりますね。

ディテールは結構大変なんです。前面敷地から何メートル建築線を下げなければい
けないか。あるいは車回しをどうしたらいいか。そういう専門家的なことが残ります。
そういうことについては、再開発の経験の多い不動産屋さんがやる。不思議なんです。
都庁の都市整備局の課長さんか係長さんが来て、専門家と、壁面線の設定をどうする
か、車回しをどうするか、避難通路をどうするか、デザインの隣棟間隔をどうするか
ということをここで決める。最後の責任は行政担当者が決めるんです。このやり方は
イギリス型です。イギリス型は四の五の議論するけれども、最後はプロフェッショナ
ルな都市計画の担当役人が決める。それでいこう。僕は新語をつくりました。「計画裁
定」。決定ではない、裁定する。こうすると、相当面白いことができそうだ。

問題は、専門家がいるかということが逆に問われてくる。いつまでも黒川や伊藤の
時代ではないだろう。若い人をもっと出せ。ところが、若くてもやれるかという
結構大変なんです。今から育成しなければいけない。そういう話が1つあります。だ
けれども、これは相当魅力的です。

(図22)

僕は。高輪・東五反田、南麻布・広尾・白金台、南青山・神宮前を国際居住区に指
定したい。相当具体的です。全部調べたんです。他には、隅田川の向うでも国際居住
区をつくりたいからというので、深川と門前仲町をあげています。門仲は墓場
いいところがあるんです。そこに決めました。墓場についてはどうしても僕は話したいこ
とがあります。それから深川もいい。

ニューヨークのシティコープの人や、コロンビア大学の先生が1年日本に留学する、
または、ポートオーソリティーの専門家が東京都庁に来た。そういう人たちがここに
1年ぐらい居を構えて仕事に行く。そういう場所にしてみたいと思うんです。

こういうことを言う人がいました。国際居住区でコーカシアンを東京に集めればい
いといっても、東京にそれだけの魅力があるか。日本は世界で第3の市場だから、い
いものをつくれれば日本でかなり物が売れるんです。今の段階だと韓国よりも倍売れる、
中国よりも5割増し売れる。日本というのは非常に大きな市場なんです。市場が大き
いから、BMWはBMWジャパン本部を東京につくります。ところがジャパン本部が

ついでに上海や香港やマニラの BMW のセールスマーケットも支配できるようにするかといたら絶対しない。なぜかという、BMW ジャパン本部というのは、秘書についても、日本人の事務員の仕事をする人たちの話の進め方についても、まさに日本的なんです。日本語はビジネスを進めるのには向かないんです。日本的な曖昧さや、日本語そのものが持っている非断定的な言い方があって、ジャパンはつくるけれども、インターナショナルを東京につくるかというにつくらない。それはシンガポールや香港に持って行って、中国の秘書を介する。中国語と英語は似ています。思考過程は同じです。日本に持ってきたら、デシジョンメイキングは1週間かかるが、その支店を香港に持っていけば多分3日で決まるはず。そういうことがあるので、BMW はアジア本店を東京に置かないで、香港やシンガポールに置きます。

ただし、そのときにこういうことがありました。これが言いたいんです。日本は、香港やシンガポールに比べて特に防犯の面では一番安全で安心な街なんです。お医者さんもいい、学校もいい、海外の連中のクラブもある、そういう都市環境を東京につくっておけば、BMW のドイツ人がシンガポールで仕事をするとき、家族は東京に置いて、火水木金をシンガポールで働いて、土日月は東京に戻ってきて家族と一緒に生活をする。これが僕の夢です。家庭の場は東京につくる。東京はずっとすぐれてできる。そういう考え方もあるのではないか。相当立ち入った考え方です。

こんな議論をエコノミストはしません。竹中さんも八田さんもしません。ましてや政治家もしない。都市計画で、どういう客層に対してどういう住宅やどういう新しい地域を供給するかといったときは、その辺まで考えて1つの行政方針を組み立てなければいけないんです。行政はそういうことを考えて世の中を引っ張ってってもらいたいと思います。銃後の守りは安心ですよと戦争のときに言われました。銃後が日本なんです。

まだ言いたいことはたくさんありますが、とりあえずこれで終わりにします。まだいろいろな話がありますが、それはまた別な機会に別なところでお話をさせていただきます。もっと面白い話があるんです。どうも失礼しました。(拍手)

谷 伊藤先生、どうもありがとうございました。皆様、先生にもう一度大きな拍手をお送りください。(拍手) 先生、ありがとうございました。

以上をもちまして NSRI フォーラム特別講演会を終了させていただきます。

(了)



— 伊藤 滋氏 —